

## 和陶歸園田居六首并引

陶の「園田の居に帰る」六首に和す并びに引

紹聖二年（一〇九五）三月四日六十歳、惠州にあって作る。

「歸園田居」陶淵明の原作は彭沢県の県令をやめて郷里の田園に帰ったときの作。

蘇軾はその詩の韻字をもちいたただけで。内容は同じてはなく、自身の経験を述べる。

三月四日、遊白水山佛迹巖、沐浴于湯泉、晞髮于懸瀑之下、浩歌而歸。肩輿卻行、以與客言、不覺至荔支浦上。晚日葱曠、竹陰蕭然、荔子纍纍如芡實矣。有父老年八十五。指以告余曰、及是可食、公能攜酒來遊乎。意欣然許之。歸臥既覺、聞兒子過誦淵明歸園田居詩六首、乃悉和其韻。始余在廣陵、和淵明飲酒二十首。今復為此、要當盡和其詩乃已耳。

三月四日、白水山の仏迹巖に遊び、湯泉に沐浴し、髪を懸瀑の下に晞かし、浩歌して帰れり。肩輿にて却行するに。客と言うを以つて覚えず荔支浦上に至れり。晚日は葱曠として、竹陰は蕭然たり、荔子は累累として芡実の如きなりき。父老有り、年八十五なり。指さして以つて余に告げて曰く、「是の食う可きに及ばば、公能く酒を携さえて来り遊ばんか」と。意欣然として之を許す。帰り臥して既に覚めたる時、兒子過の淵明の「園田の居に帰る」詩六首を誦するを聞き、乃ち悉く其の韻に和せり。始め余の広陵に在りしとき、淵明の「飲酒」二十首に和せり。今復た此を為る、要ず当に尽く其の詩に和して乃ち已まん耳。

※兒子過…蘇軾の男子三人の末子、字は叔党。詩人で「斜川集」二十卷があり（一〇七二—一一二二）、小坡とよばれた。父が惠州に流されたとき、これに従った。

【解釈】三月四日。私は白水山の仏跡巖に遊んだ。その温泉に入浴し、たきの下で頭髪をかわかしてから、歌をうたいつつ帰って来た。かごに乗ってもどる途中、同行の人たちと話しこんでいて、いつのまにか荔支浦まで来ていたことである。夕日の光はあわく竹の木かげに人影もなく、れいしの実がひしの実のように枝もたわわになつてゐる。八十五歳になるといふ土地の老人がいて、その方を指さし、私に話しかけた。「あれが食べられるころになつたら、ひとつ酒を持っておいでにはなれませんか」私はうれしく感じ、その約束をした。家へ帰って、ひとねいりし、目がさめたとき、せがれの過が陶淵明の「園田の居に帰る」詩六首を朗誦しているのが耳に入ったので、そこでその韻にあわせて六首すべて作った。以前、私が揚州にいたころ淵明の「飲酒」の詩二十首に和したことがある。今日はまたこの詩を作ったのだが、ゆくゆくはぜひ、かれの詩の全部に次韻してしまいたいものだと思う。

和陶歸園田居六首 其二

- |          |               |
|----------|---------------|
| 1 窮猿既投林  | 窮猿 既に林に投じ     |
| 2 疲馬初解鞅  | 疲馬 初めて鞅を解く    |
| 3 心空飽新得  | 心は空しゆうして新得に飽き |
| 4 境熟夢餘想  | 境は熟して 余想を夢む   |
| 5 江鷗稍馴集  | 江鷗は 稍しく馴れ集まり  |
| 6 蟹叟已還往  | 蟹叟は 已に還往す     |
| 7 南池綠錢生  | 南池には 綠錢生じ     |
| 8 北嶺紫筍長  | 北嶺には 紫筍長ず     |
| 9 提壺豈解飲  | 提壺 豈に 飲を解せんや  |
| 10 好語時見廣 | 好語 時に 広うせ見る   |
| 11 春江有佳句 | 春江 佳句 有り      |
| 12 我醉墮渺莽 | 我 醉うて 渺莽に墮せり  |

【語釈】

○投林：林へにげこむ、とびこむ。○解鞅：鞅は馬のくびにくくりつける革ひも。○境熟：境は自己の周囲にある物・熟はすっかり親しみぶかいものになったこと。○夢余想：余想は昼間のさまざまな想念の延長。○蟹叟：蟹民の老人。○還往：往還・往來に同じ、ゆききする。○綠錢：錢は（銅貨）円から蓮の葉にたとえる。○紫筍：筍はたけのこ。紫は皮の色。○提壺：野鳥の名。提壺盧ともいう。なき声が「壺盧をもってゆけ」と聞えるのでこの名がある。○豈解飲：酒をのめるはずがないのに。○好語：うれしいことば。

【解釈】

追い詰められた猿が林に逃げ込み、一息ついた後。疲れ果てた馬がくびきの紐から放たれたとき。私はそんな身の上だ。心から煩わしさはすべて消え去り、新鮮なよろこびに満たされ、十分に親しくなった物のすがたが溢れて夢の中まで入り込む。川のかもめもだんだんに、なれておりてくるし、蟹民のおきなさえ、今はもう心おきなくゆききする。南の池では、はちすの円い葉が大きく、北の山では紫のたけのこが伸びているらしい。酒の味は知らないくせに、提壺の鳥のさえずりが、折々うれしい言葉をかけて慰めてくれる。春の大川。そこでは素晴らしい詩句が見つかったのだが、私は酔っ払って、そいつをどこか遠いところへ忘れてきたと見える。

其三

- 1 新浴覺身輕 新浴身の軽きを覚え
- 2 新沐感髮稀 新沐髮の稀なるを感ず
- 3 風乎懸瀑下 懸瀑の下に風し
- 4 却行咏而歸 却行には咏じて帰らん
- 5 仰觀江搖山 仰いで觀る江の山を揺がすを
- 6 俯見月在衣 俯して見る月の衣に在るを
- 7 步從父老語 步して父老に従つて語る
- 8 有約吾敢違 約有り吾敢て違はんや

其四

- 1 老人八十餘 老人 八十餘
- 2 不識城市娛 城市の 娛を識らず
- 3 造物偶遺漏 造物 偶々遺漏す
- 4 同儕盡丘墟 同儕 尽く丘墟
- 5 平生不渡江 平生 江を渡らず
- 6 水北有幽居 水北に 幽居有り
- 7 手插荔支子 手づから 荔支の子を挿み
- 8 合抱三百株 合抱 三百株
- 9 莫言陳家紫 言ふ莫れ 陳家の紫
- 10 甘冷恐不如 甘冷 恐らくは如かずと
- 11 君來坐樹下 君來りて 樹下に坐し
- 12 飽食攜其餘 飽食 其餘を携へよ
- 13 歸舍遺兒子 舍に歸つて 兒子に遺らん
- 14 懷抱不可虛 懷抱 虚しうす可からず
- 15 有酒持飲我 酒有り 持して我に飲ましむ
- 16 不問錢有無 錢の有無を 問わず

今しがた入浴を終えたばかりの体は、ひどく軽々としている心地、いま洗ったばかりの髪のは、急に沢山抜け落ちてしまったような気がする。白水山にかかる瀑布の滝つぼの辺りで風涼みし、帰途は詩を吟じつつ帰ることにしよう。

仰ぎ見れば、たゆとう江の流れに山がゆらぐかに見え、うつむけば月は我が衣に照っている。土地の老人と歩をあわせてあゆみつつ語り合う。(荔子の実の食べれる頃、また来るよと)約束した以上、私は何でその約束をたがえよう。

八十の坂を越えたこの老人は、この歳まで「もっぱら生業に励み」、まったく城市の歡樂を知らないでいる。たまたま造物主のお目こぼしにあつたのであろうか。同輩はもうすっかり土まんじゅうになつているであらうに。老人は生涯、江を渡ることなく、川の北岸にわび住まいをかまえている。その手で蒔いた荔枝の実が、いまではひとかかえもあらうとみえる三百株もの大木に成長している。

老人はいう。「〔閩中一の荔枝〕陳家紫ほどには、すがすがしい甘みが、おそらくはあるまい、などとはおっしゃるな。あなた、まあわしの園へおいでになつて樹の下に坐り、たらふくめしあがつて、食べきれんぶんは持つて帰りなさい」と。

家へ歸つて息子にたべさせよう。この老人の好意を無にしてはならないのだ。しかも老人は酒を持ち出して、わたくしに飲ませ、錢をもっているかどうかなど、たずねもしない。